



TAKE OFF press

TAKEO Future Frontier

【校是】 質実剛健 報恩感謝

佐賀県立武雄高等学校

校長通信 NO.1 R6.04.08

文責 校長 下村 昌弘

E-Mail shimomura-masahiro@education.saga.jp



学校 HP

神の宿る桜並木に見守られて —新しい気持ちで新年度のスタートを！—

武高坂の桜並木も、数日前の花散らしの雨で、さすがに美しく咲き誇っていた花びらをずいぶん散らせてしまいました。それでも始業式に花を添えようと、いくばくかの花びらをしっかりと手放さず、私たちを迎えてくれています。ありがたい風景です。この桜並木は本校のシンボルです。

ピンクの花びらの次は、葉桜の緑がみずみずしい生命力を感じさせてくれます。桜は花が先に咲いて葉が後に出る、他の植物とは逆の過程を持つ、不思議で神秘的な花です。

ところで、皆さんは「桜」という言葉の語源を知っていますか。「さ」は「稻」の神。「くら」とはその神様が座る「場所」という意味です。つまり桜は神様が宿る木なのです。その神様がこの学校で学ぶ皆さんを守ってくれているわけです。

さあ新年度がスタートしました。新学年、新クラスという新しい環境で気分一新、頑張っていきましょう。



この学校はどこへ向かうのか —スクール・ミッション策定—

4月4日の佐賀新聞で報道がありましたが、佐賀県の県立高校で地域や歴史的背景を踏まえた特色ある学校づくりを目指し、県教育委員会は各学校に向けてスクール・ミッションを策定しました。本校へのスクール・ミッションは次のようなものです。

- 西部地区唯一の県立中高一貫教育校として、6年間を見据えたカリキュラムに基づく教育実践を更に充実させる。
- 自治体との連携等による探究を中核とした学びを一層推進し、これからの時代を生き抜く資質・能力を涵養し、地域や国際社会が抱える課題の解決に対して主体的に行動できる人材を育成する。

本校には進学を志す人がたくさんいます。皆さんも実感として周りの友人たちから、いい意味で向上心を刺激されると感じている人も多いのではないのでしょうか。

中高一貫校ではありますが、高校に入ってからにはノーサイド。出身中の枠を取り払い、一人一人が武雄高校生として自立的な生活を送ることを期待しています。

そして本校の強みの1つに、これまで武雄市との協働による探究的な活動を積み重ねてきたことがあります。これからは時代の潮流に鑑み、自治体にとどまらず、企業や大学等との連携を一層強化しながら、学校教育目標を達成できるよう、探究を大切にする学校にしていきたいと思っています。

探究とは自分の興味・関心のある分野を深掘りすることです。教科・学問でも、部活動・生徒会活動でも、或いは街づくり、留学、各種イベントなど、校外での様々な活動でも何でもいい、一番自分らしいと思える、自分の強みとなる分野を探し挑戦してほしいのです。そこではうまくいかないこともあるかもしれませんが、いや、むしろうまくいかないことのほうが普通です。高校、大学ではたくさんの Try & Error を経験することが大事です。そ

れをとおしてたくましさとしなやかさが鍛えられます。

勉強は目的ではありません。探究を支える手段です。探究する力、探究する方法こそが、先行き不透明なこれからの時代、これまでなかった問題に遭遇する時代、正解がもはや何か分からない時代を生き抜く術すべとなります。どうか皆さん、探究を大切にしてください。

※スクール・ミッション、スクール・ポリシーについては【学校 HP→学校紹介→武雄高校の紹介】をご覧ください。

『走ることに語るときに僕の語ること』 —なぜ人は走るのか—

表題は村上春樹という作家が書いた本のタイトルです。彼もまた市民ランナーの一人であり、「走ること」と「小説を書くこと」の近しさをその本に書いています。

もちろん僕だって負けず嫌いなところはない。しかしなぜか、他人を相手に勝ったり負けたりすることには、昔から一貫してあまりこだわらなかった。そういう性向は大人になってもおおむね変わらない。何事によらず、他人に勝とうが負けようが、そんなに気にならない。それよりは、自分自身の設定した基準をクリアできるか、できないか——そちらのほうにより関心が向く。そういう意味で長距離は僕のメンタリティにぴたりとあてはまるスポーツだった。

(前掲書 2010年 文春文庫 P. 23)

小説を書くことも同じで「書いたものが自分の設定した基準に到達できているかいないかが何よりも大事になる」と村上春樹は言っています。学ぶことも基本的には同じことだと思います。基準を自分以外にはではなく、自分の内側にもてる人は必ず強い人です。

私事ながら、先月、さが桜マラソンに出場し最後まで走りとおすことができました。4時間くらい時間がかかりましたが、「少なくとも最後まで歩かなかった」ことこそが何よりもの勲章です。人との勝ち負けではなく、私の基準はそこにありましたから。

4時間は決してあっという間ではありません。その間、後悔や苦しさが次々に襲ってきます。それでも一步一步足を出さなければ終わりは来ません。フルマラソンを始めたころは、顔を上げて走ることができませんでした。下ばかり見て走っていました。ゴールの遠さを感じると気持ちがなえるからです。でも今は、一步一步踏み出していくとゴールは必ず近づくという感覚が持てるようになりました。

新年度のスタートに当たり、皆さんもゴールがどこにあるのか、そこには何があるのか、そもそも分からないものなのかもしれません。一步一步自力で踏み出さなければならぬマラソンと違って、1日、1日は黙っていても過ぎてしまいます。この1日、1日の積み重ねでゴールの日が訪れるとするなら、意識的な毎日の積み重ねであるべきです。徒いたづらに日々を暮らすことなく、自覚的な毎日であることを願っています。



【当面の主な予定 (4月前半)】

- 8日(月) 始業式・新任式
- 9日(火) アーチーブテスト (2・3年)
- 10日(水) 入学式
- 11日(木) 対面式・学力診断テスト (1年)
- 12日(金) 身体測定 (全学年)
- 15日(月) 部活動紹介 (1年)

(閑人閑話) 3月から4月にかけて怒涛の日々を送った。どこの職場でもそうかもしれないが、学校は年度の切り替わりにはやるべきことが多い▼そんな中でも、寸暇を惜しんで映画を見た。もちろんそれだけに没頭することはできないので、何かの縁で上映会に参加したり、ジムで走りながらサブスクの映像に見入ったり。そこで2つの気づきを得た▼一つは武雄市文化会館で開催された武雄アジア韓国映画祭で上映された『心の傷を癒すということ』(坂本佑主演)。阪神大震災で被災者の心のケアに当たった在日韓国人、安克昌医師をモデルにした映画。正確な表現ではなくて恐縮だが「できない理由を並べる時は本当は理由がないということだ」というセリフが何回か出てきた。▼二つめ。サブスクで見るとき、時間がなくて途中で止めることもあれば、当然、俳優の表情もその瞬間に固まる。目が半開きということもある。しかし、その半開き具合は実に美しい。我々素人が写真撮影で半開きになる顔は滑稽だが、俳優のそれは両目が均等に半開きなのだ。ほぼ100%。これはきつと見られているという意識がその人の所作を作っているのだと合点している▼違うかもだけ。(昌)